

# 『村の司祭』解説

—— 一女性の魂の歴史 ——

村 田 京 子

## 序

『村の司祭』においては、「人間喜劇」の中でも例外といってよい程、一人の人物の誕生から死に到るまでが一貫して描かれている。その為、我々は、他の作品から切り離して集中的に、主人公の辿った人生の軌跡を追うことができる。我々は、女主人公ヴェロニックが屑鉄商の子供として生まれ、青春時代を頑丈な錠戸に閉ざされた暗い家の中で過ごし、銀行家グララン氏と結婚、男児を出産するまで順に、彼女の成長過程を見ることができる。しかし、そこでバルザックが描いているものは、ヴェロニックの家の克明な描写、彼女の人生にとって特筆すべき事件、彼女の身体特徴の変化といった、外的事実の叙述でしかない。皮相的な事象のみに終始され、時間の流れを追った心理の論理的分析は少しもなされていない。従って我々読者は、一見静かで単調な彼女の生活の中の背後に隠された秘密を、断片的に感じ取る他ない。更に、突然「タシュロン事件」（タシュロンという男が強盗に入って殺人を犯し、死刑に処せられる事件）が、ヴェロニックの物語に挿入される。この事件が何故ヴェロニックに関係があるのか、その理由を我々は推測するしかない。彼女が強盗殺人の共犯者であったことが明白になるには、死を前にした彼女の告白を待たねばならない。また、既に人妻であったヴェロニックがタシュロンと、どのように恋愛に陥ったのか、どうして強盗を企てるに到ったのか、その経過すらも全くヴェールに被われたままである。バルザックは淡々と、新聞記者が事件を報じるが如く、タシュロンの事件を報じ、主人公とはほとんど無関係に、彼の裁判、処刑へと筆を進めている。タシュロンの処刑後、再びヴェロニックの話に戻る。モンテニャックでの彼女の灌漑工事が話題の中心となり、彼女の死の直前の罪の告白で、物語は結ばれている。ヴェロニックの物語は、「罪と贖い」のドラマであるはずなのに、罪自体は謎に包まれ、彼女が悔悟と贖いへと進んでいく心理的過程も、我々の推測に任せられたままである。

このようにバルザックは、この小説において、登場人物の心の襲までも知悉した全能の創造主として存在するのではなく、一介の観察者でしかない。彼が扱った所とするのは、外面に現われた特徴のみである。しかし、ヴェロニックの顔つきや身体に現われる変化の詳細な描写や、自然描写の長い件を綿密に検討していけば、そこに埋め隠された、主人公の内面のドラマが見出される

はずである。実際、小説の中でも三人の炯眼な観察家たち（デュティユ神父、ボネ神父、医者ルーボー）は、ヴェロニックへの鋭い一瞥によってたちまち、彼女の内心を見抜いている。例えば、デュティユ神父は、彼女の眼の微妙な変化[『黒い瞳が青い虹彩を侵して拡がり、その虹彩が一筋の細い輪にまで狭まった』(p. 748)]の中に、検事への彼女の激しい怒りを看取している。ボネ神父においても、バルザックは、モンテニャックの野蛮な住民の精神状態を変化させることのできるくらい人間ならば、「当然何らかの観察眼は具えており、多少とも観相家(physionomiste)であるに違いなかった」(p. 726)と述べている。

ところで、バルザックが「観察家」と言う時、この言葉には特別な意味合いが込められている。彼の意味する「観察家」になる為には、「人間の心の底に潜むいかなる感情の襲をも逃さずとらえ」、人が「我あらずふと覗かせる意識の片鱗まで究める」細心さと忍耐強さ、その上「諸々の事象を見るや直ちにその中心を見てとる眼力」、「それらの事象を体系づける論理力、一瞥して原因に溯る素早い洞察力<sup>1)</sup>」等が必要である。優れた観察家は、ボネ神父のように、魂を覆い隠している肉のヴェールを貫き、心の秘密を探り出すことのできる直観的な洞察力、いわば神秘的な関与能力を具えた者である。

バルザックは、『歩き方の理論』の中で、高らかに宣言している。「観察家というのは異論の余地なく第一級の天才である<sup>2)</sup>」と。そして、彼自身も『ファチノ・カーネ』の中で告白しているように<sup>3)</sup>、一流の「観察家」であった。従って、彼が日常的存在の細部を執拗に描くのは、現実を忠実に再現するためではない。彼にあっては、一見何の関連もみられないような、現実の平凡なイメージの数々が、互いに結びつき、符合し、互いの類似性を啓示し合う。それらは原因から結果へと連鎖しながら、ある一点へ、中心へと還元されていく。アルベール・ベガンは、バルザックの世界において、事物や動作を正確に指示する平凡な叙述が、突然変わる瞬間をとらえている。その時、物語はすべての動きを止め、一種の観想状態に入る。バルザックは言魂<sup>ことだま</sup>の暗示に身を委ね、「いとも具体的な語にもっと即物性の乏しい類義語、同義語が重ねられ、単なる音の類似が語から語へと暗示的な語呂合わせをへて、文章の流れを逸らせてしまう。明らかに作者は非常に特殊な状態の中に入ってゆくのであり、そこでは生への異例な参入の仕方が、言葉の本質への、それに劣らず奇異な参入によって啓示される<sup>4)</sup>」。それは、外的事物が、バルザックの外で客体としての存在を続けることをやめ、彼の中に引き寄せられ、「照応の複雑な網とその無限の交換の中に入って座を占める瞬間<sup>5)</sup>」である。

我々読者は、作品においてこれらの瞬間を看破し、原因結果の連鎖を辿り、隠蔽された本質を認識せねばならない。我々もまた、「観察家」であらねばならない訳だ。ベガンは言う。「『村の司祭』のあらゆるエピソードを思い出し、その外的事件の進行の裏にあってこの本の隠された筋を構成している瞬間の場面のつながりを辿ってみるが良い。それはヴェロニックの魂の物語になっているのである<sup>6)</sup>」。

従って、この小論では外的事物の描写を通して「ヴェロニックの魂の物語」を掘り起こしていこうと思う。外的事物としては、特に主人公の身体特徴の変貌と、自然描写を取り上げてみたい。というのも、この二つの描写がうまく絡み合って、小説構造を支える軸となっているように見受けられるからである。

ヴェロニックの人生は、大きく二つに分かれる。誕生から結婚までのリモージュ時代と、灌漑工事を推し進めていくモンテニャック時代で、リモージュ時代は、主に顔貌の変化が彼女の心理状態のバロメーターとなっている。それはモンテニャック時代でも彼女の心の表徴であるが、モンテニャック時代では、自然がそれ以上に大きな指標となっている。ではまず、顔貌や体つきの変化を、次に自然の持つ意味を具体的に検討し、最後にこれら二つの表徴を統合した形で、主人公の心的過程を分析することにしよう。

## 第一章 身体特徴の変容

『歩き方の理論』の中で、バルザックは次のように述べている。

鋭い眼を持った人なら、一人の人間の動きを見てその悪徳も悔恨も病も見抜いてしまうとは考えるだに恐ろしい話ではないか。知らぬ間に生々しく現われるこの意思の作用には何と豊かな言葉が潜んでいることだろう！〔……〕いずれも皆我々の意思が刻まれていて、恐るべき意味を表わしている。それは言葉以上のもの、動いている思想なのだ<sup>7)</sup>。

また、『従兄ポンス』では、「神がそれぞれの人間の運命をその変貌の中に刻みつけた」(VII, p. 585)とも彼は語っており、身体特徴は、登場人物の感情や心の動きを表わすだけではなく、運命や生き方そのものまで決定づけるものである。『村の司祭』においても、ある登場人物がヴェロニックを評して、「グララン夫人にあっては、魂が一旦、真の情熱に揺り動かされると、顔に一つの表情が溢れてきて、それまでの顔が一変してしまうのです」(p. 677)と述べているように、彼女の表情の変化は、周りの者にとっても顕著である。

それでは、ヴェロニックの身体特徴の変貌を順を追って見ていくことにしよう。彼女の身体について言及があるのは、9歳の時である。

(1) 9歳……ヴェロニックは界限の人々を驚かすほどの天上的な美しさを持っている。

Chacun admirait un visage qui pouvait être un jour digne du pinceau des peintres empressés à la recherche du beau idéal. Surnommée *la petite Vierge*, elle promettait d'

être bien faite et blanche. Sa figure de madone, car la voix du peuple l'avait bien nommée, fut complétée par une riche et abondante chevelure blonde qui fit ressortir la pureté de ses traits. Quiconque a vu la sublime petite Vierge de Titien dans son grand tableau de la Présentation au Temple, saura ce que fut Véronique en son enfance : même candeur ingénue, même étonnement séraphique dans les yeux, même attitude noble et simple, même port d'infante.(p. 648)

(2) 11 歳……天然痘にかかり，彼女の美貌は損われてしまう。

Cette figure, également colorée par une teinte où le brun et le rouge étaient harmonieusement fondus, resta frappée de mille fossettes qui grossirent la peau, dont la pulpe blanche avait été profondément travaillée. Le front ne put échapper aux ravages du fléau, il devint brun et demeura comme martelé. Rien n'est plus discordant que ces tons de brique sous une chevelure blonde, ils détruisent une harmonie préétablie. Ces déchirures du tissu, creuses et capricieuses, altérèrent la pureté du profil, la finesse de la coupe du visage, celle du nez, dont la forme grecque se vit à peine, celle du menton, délicat comme le bord d'une porcelaine blanche. La maladie ne respecta que ce qu'elle ne pouvait atteindre, les yeux et les dents. Véronique ne perdit pas non plus l'élégance et la beauté de son corps, ni la plénitude de ses lignes, ni la grâce de sa taille.(pp. 648-649)

(3) 15 歳になると，彼女は一廉の美しい娘となり，16 歳ですっかり成長しきって，その本領を現わす。

Elle avait une taille moyenne, ni son père ni sa mère n'étaient grands ; mais ses formes se recommandaient par une souplesse gracieuse, par ces lignes serpentine si heureuses, si péniblement cherchées par les peintres, que la Nature trace d'elle-même si finement, et dont les moelleux contours se révèlent aux yeux des connaisseurs, malgré les linges et l'épaisseur des vêtements, qui se modèlent et se disposent toujours, quoi qu'on fasse, sur le nu. Vraie, simple, naturelle, Véronique mettait en relief cette beauté par des mouvements sans aucune affectation. Elle sortait son plein et entier effet, s'il est permis d'emprunter ce terme énergique à la langue judiciaire. Elle avait les bras charnus des Auvergnates, la main rouge et potelée d'une belle servante d'auberge, des pieds forts mais réguliers, et en harmonie avec ses formes.(p. 651)

Véronique avait des lèvres parfaitement arquées qu'on aurait crues peintes en vermillon, tant y abondait un sang pur et chaud. Son menton et le bas de son visage étaient un peu gras, dans l'acceptation que les peintres donnent à ce mot, et cette forme épaisse est, suivant les lois impitoyables de la physiognomonie, l'indice d'une violence quasi morbide dans la passion. Elle avait au-dessus de son front, bien modelé mais presque impérieux, un magnifique diadème de cheveux volumineux, abondants et devenus châains.(p. 652)

以上が、ヴェロニックの結婚するまでの外貌の変化である。

ところで、「人間喜劇」における身体特徴と心的現象及び運命との照応について、Tahsin Yücel がその著 *Figures et Messagers dans la Comédie humaine* の中で詳しく分析しており、『村の司祭』にも言及しているので、主に上記の著に従って検討していきたい。

Yücel は、「人間喜劇」に現われる人物の体つきを、〈anguleux〉(骨ばった)、〈sinueux〉(蛇のように曲線的な)、〈bossué〉(でこぼこの)の三つに区分している。〈anguleux〉と結びつく語彙は〈sec〉(干からびた)、〈stérile〉(不毛の)、〈froid〉(冷たい)といった語で、ゴブセックに代表される吝嗇家、または従妹ベットのように一つの情念にとらわれた者たちで、力に溢れているが、その発露は常に破壊的な方向に向かう。それに対し、〈bossué〉のカテゴリーに入る者は、太ってぶよぶよした肉体を持ち、人生の享樂者、地上の幸福の追求者である。〈anguleux〉、〈bossué〉の両者は、一方が知的なのに対し、他方は本能的、一方が無感動に対し、他方は情動的と、対極をなすが、どちらも不純な物質性 (matérialité) を引きずっている。それに反して〈sinueux〉は〈pur〉(純粋な)、〈transparent〉(透き通った)、〈fluide〉(流動的な)といった語と結びつき、セラフィタに代表される天使的な人物にあてはまる。〈sinueux〉はいわば、非物質性 (immatérialité) の象徴で、前の二者と対立するものである。

では、このような三つのカテゴリーを参照しながら、ヴェロニックについて検討してみよう。9歳の時の、「豊かな、ふさふさとしたブロンドの髪」、「姿の美しい色白の女」という表現は、天上を約束された特権の人物の特徴にあてはまる<sup>8)</sup>。また、ヴェロニックを形容するのに、〈madone〉、〈pureté〉、〈sublime〉、〈candeur〉、〈séraphique〉、〈noble〉等の語が連なり、彼女の運命は、セラフィタ同様に天使的存在となるべく定められていたことになる。

その運命が、11歳の時の天然痘によって、大幅に改変する。顔の色は白から褐色と赤に染まり、皮膚は小さな無数の穴で分厚くなり、白い肉の層も奥深くまで冒されてしまう。額は褐色に変わり、まるで槌で打ったようになる。顔の輪郭や鼻、「白い磁器のようなデリケートな顎の繊細さ」が損われてしまう。これらの変化はすべて、天上的な性質から地上的なものへの失墜を表わしている。

その反面、身体の優雅さ、豊かな曲線、胴体の優美さは保ち続けており、ここに地上的なもの

(Terre) と天上的なもの (Ciel) との対立が起こる。

16歳では、体の優雅なしなやかさと、蛇のような素晴らしい曲線(C)を持ってはいるが、肉付きのいい腕や、赤いぼってりした手(T)と対立しており、たくましい(T)が形のいい(C)足を持っている。完全に弓形(C)だが、朱で描いたかと思える熱い血汐で漲った(T)唇。顎と顔の下半分は厚ぼったい(T)が、形のいい顔(C)をしている。髪は金髪(C)から栗色(T)に変わっている。

16歳のヴェロニックを、9歳の時と比べて表にすると表1のようになる。

表1

	Ciel	Terre
髪	(金色) 豊富	栗色
顔	(白色)	褐色と赤
皮膚	(白色, 繊細)	無数の穴で分厚くなる
顎	(白色)	褐色, 槌で打ったよう
鼻	(ギリシャ鼻)	損なう
顎	(白い磁器の線のような繊細さ)	厚ぼったい
唇	完全に弓形	朱色, 熱い血汐で漲った
体つき	中背, 優雅で豊かな曲線	
足	形のいい, 体恰好に釣り合った	たくましい
腕		肉付きのいい腕
手		赤いぼってりした手

( )内は、9歳時のヴェロニックの特徴

9歳時と16歳時を比べてみると、鼻と顎が<sinueux>から<bossué>に、<petit>、<étroit>から<grand>、<large>へ変化していることがわかる。これは、Yücelによれば、「官能 (sensualité)」、「性欲 (sexualité)」への強い傾向を示すことになる。また、「肉付きのいい腕」や「ぼってりした手」が上記の傾向を証拠立てている。一方で、ヴェロニックは誠実で純真な、汚れない娘として質素で静かな生活を送っているが、他方、彼女の魂の奥底には、激しい肉の情念が秘められているのである。このように、ヴェロニックの内心の二つの矛盾した傾向が、身体に明白に刻み込まれている。

それだけではない。聖体拝受の際に不思議な現象が起こる。天然痘によって、ヴェロニックの美貌は完全に失われたようにみえるが、何か激しい感情が内に湧き起こると、内面の光の輝きによって天然痘の跡が消し去られ、もとの美貌が再び甦ってくる。

Quand un sentiment violent éclatait chez Véronique, et l'exaltation religieuse à laquelle elle était livrée alors qu'elle se présentait pour communier doit se compter parmi les vives émotions d'une jeune fille si candide, il semblait qu'une lumière intérieure effaçât par ses rayons les marques de la petite vérole. Le pur et radieux visage de son enfance reparaisait dans sa beauté première. Quoique légèrement voilé par la couche grossière que la maladie y avait étendue, il brillait comme brille mystérieusement une fleur sous l'eau de la mer que le soleil pénètre. Véronique était changée pour quelques instants : la petite Vierge apparaissait et disparaissait comme une céleste apparition. La prunelle de ses yeux, douée d'une grande contractilité, semblait alors s'épanouir, et repoussait le bleu de l'iris, qui ne formait plus qu'un léger cercle. Ainsi cette métamorphose de l'œil, devenu aussi vif que celui de l'aigle, complétait le changement étrange du visage. (pp. 651–652)

ここで面白いことは、ヴェロニックが元の美貌を取り戻す原因としてバルザックは、神への愛ではなく「抑圧された情熱の嵐」、「魂の奥底から湧き上がる力」(p. 652)を挙げていることである。官能的な情熱の極みにあって、ヴェロニックは、「神々しい美しさ」を放つ。ここに彼女の本質と運命が予告されていないだろうか。彼女は、『谷間の百合』でモルソー夫人が述べているように<sup>9)</sup>、肉の赤い垢垢を通ることによって浄化され、「かくて肉は言葉となり、肉は神の言葉とならん」(XI, p. 689)というルイ・ランベールの言葉を地をいく人生を歩むことが予め定められていると言えないだろうか。

この問題は少し置いて、小説の内容に沿ってヴェロニックの顔つきの変化を更に辿っていくことにしよう。

グララン氏との結婚後、彼女は痩せて実際に醜くなる。目鼻立ちは大きく膨れ、態度はおどおどしてぎこちなく見え、眼差しには、「信心家の女達がよく非難される、あの陰鬱な冷たさ」(p. 668)が浮かんでいる。容貌は全体に灰色を帯びてくる。結婚に対する失望、本来の自分を見出せずにいるヴェロニックの「気の抜けたような一種の麻痺状態」(p. 667)が、そのまま顔に現われている。9歳時の顔に認められた<sinuosité>、<clarté>、<fluidité>の三つの特徴がすべて打ち消された形である。

しかし、結婚の5年後、彼女の顔つき、体つきが突然変貌する。彼女は「美しきグララン夫人」と仇名をつけられるほど、美しくなる。

Le bleu de l'iris s'agrandit comme une fleur et diminua le cercle brun des prunelles, en paraissant trempé d'une lueur moite et languissante, pleine d'amour. On vit blanchir, comme une faîte à l'aurore, son front illuminé par des souvenirs, par des pensées de

bonheur, et ses lignes se purifièrent à quelques feux intérieurs. Son visage perdit ces ardents tons bruns qui annonçaient un commencement d'hépatite, la maladie des tempéraments vigoureux ou des personnes dont l'âme est souffrante, dont les affections sont contrariées. Ses tempes devinrent d'une adorable fraîcheur. On voyait enfin souvent, par échappées, le visage céleste, digne de Raphaël, que la maladie avait encroûté comme le temps encrasse une toile de ce grand maître. Ses mains semblèrent plus blanches, ses épaules prirent une délicieuse plénitude, ses mouvements jolis et animés rendirent à sa taille flexible et souple toute sa valeur.(pp. 679–680)

額が褐色から白色へと変わり、その輪郭は「或る内面の火によって」清らかになる。手は以前より白くなる。これらの変化は、彼女の内で浄化作用が働いたことを明白に語っている。しかし、「ラファエルの絵にもふさわしい天使のような顔」ではあるが、「恋の想いに満ち溢れた、しっとりと悩ましげな微光」に浸された目、「追憶と幸福の想い」に輝いた額、「得も言われぬ豊満な」肩は、精神よりも肉体を想定させる美しさである。《sinueux》よりはむしろ、《bossué》に近い体つきと言えよう。彼女の生活に、夫以外の男性が深く関わっていることは明白であり、事実タシュロンと恋愛に陥った時期であった。

息子を出産した後、ヴェロニックの顔は再び変貌を遂げる。

Le visage avait alors une teinte jaune semblable à celle qui colore les austères figures des abbesses célèbres par leurs macérations. Les tempes attendries s'étaient dorées. Les lèvres avaient pâli, on ne voyait plus la rougeur de la grenade entrouverte, mais les froides teintes d'une rose de Bengale. Dans le coin des yeux, à la naissance du nez, les douleurs avaient tracé deux places nacrées par où bien des larmes secrètes avaient cheminé. Les larmes avaient effacé les traces de la petite vérole, et usé la peau. La curiosité s'attachait invinciblement à cette place où le réseau bleu des petits vaisseaux battait à coups précipités, et se montrait grossi par l'affluence du sang qui se portait là, comme pour nourrir les pleurs. Le tour des yeux seul conservait des teintes brunes, devenues noires au-dessous et bistrées aux paupières horriblement ridées. Les joues étaient creuses, et leurs plis accusaient de graves pensées. Le menton, où dans la jeunesse une chair abondante recouvrait les muscles, s'était amoindri, mais au désavantage de l'expression ; il se révélait alors une implacable sévérité religieuse que Véronique exerçait seulement sur elle. A vingt-neuf ans, Véronique, obligée de se faire arracher une immense quantité de cheveux blancs, n'avait plus qu'une chevelure rare et grêle ; ses



couches avaient détruit ses cheveux, l'un de ses plus beaux ornements. Sa maigreur effrayait.(pp. 744-745)

顔は褐色から黄色へ、唇は青ざめ、「半ば口をあけた柘榴のような赤さ」から「ベンガルのバラの冷たい色合い」へ、顎は豊かな肉付きから痩せて表情が乏しくなる。これらすべての変化は、「ひどく皺の寄った臉」、頬に刻まれた深い皺とあいまって、ヴェロニックの内における肉体の死を表わしている。「苦行で名高い尼僧院長達の峻厳な顔」、「苛烈な宗教的厳格さ」の滲み出た、生の躍動の見られない顔は、ボネ神父に恐怖に近い驚きを生じさせている。彼女の「じっと動かぬ冷たい顔」は、極度の精神的な苦痛の為に魂の気力が失せ、「無感覚の深み」に埋没していることを自ずから示している。

このような無表情な顔の中で、眼だけが若々しさを留めている。生命が眼だけに集中して宿っているかのように、濃青色の虹彩は、「野蛮な輝きを込めた光」(p. 745)を放っている。眼に、ヴェロニックの本質が押し込められた形である。

夫の死後、彼女はモンテニャックに居を移し、灌漑工事に着取する。これ以後彼女は、絶え間ない精神的な苦悩、それに伴う肉体的な苦痛に苛まれる人生を歩む。一つ一つの苦悩は、年月と共に皺になって、ヴェロニックの顔に深く刻まれていく。彼女は「肉体によって精神と闘い、同時に精神によって肉体と闘っていた」(p. 850)。その闘いによって、肉体は完全に破壊される。

Eclairée par les lueurs douces du couchant, elle resplendissait d'une horrible beauté. Son front jaune sillonné de longues rides amassées les unes au-dessus des autres, comme des nuages, révélèrent une pensée fixe au milieu de troubles intérieurs. Sa figure dénuée de toute couleur, entièrement blanche de la blancheur mate et olivâtre des plantes sans soleil, offrait alors des lignes maigres sans sécheresse, et portait les traces des grandes souffrances physiques produites par les douleurs morales. Elle combattait l'âme par le corps, et réciproquement. Elle était si complètement détruite, qu'elle ne ressemblait à elle-même que comme une vieille femme ressemble à son portrait de jeune fille.(p. 850)

黄色い額は「雲のように積み重なった長い皺」に刻まれている。顔は血色を失い、「冴えないオリーブ色がかった白さ」になる。体は痩せ細り、激しい苦痛だけを浮かべている顔は、「ぞっとする程の美しさ」ではあるが、ヴェロニック本来の美しさではない。

医者ルーボーは、彼女の荒廃を留めた顔の中に、「前代未聞の精神的、肉体的苦悩と、超人的な力を持った性格と、最も激しい人生の変遷にも彼女を耐えさせる偉大な能力」(p. 811)を見抜く。彼女の顔の色が褐色から黄色へ、「冴えないオリーブ色がかった白さ」へと、暗い濃い色から

明るい色へと清められていくのは、ヴェロニックが罪の贖いへの道へと進んでいる証拠であろう。しかし、ルーボーは故意に隠された暗い、陰の部分も、ヴェロニックの顔の中に垣間見る。意志の力によって、彼女の本質をこの「暗い陰の部分」に押し込めたために、彼女の顔を生気の乏しいものとしているのである。

彼女は死の直前に、最後の変貌を遂げる。

En ce moment un sourire où se peignait le bonheur que lui causait la pensée d'une expiation complète rendit à sa figure l'air d'innocence qu'elle eût à dix-huit ans. Toutes les agitations inscrites en rides effrayantes, les couleurs sombres, les marques livides, tous les détails qui rendaient cette tête si horriblement belle naguère, quand elle exprimait seulement la douleur, enfin les altérations de tout genre disparurent ; il semblait à tous que jusqu'alors Véronique avait porté un masque, et que ce masque tombait. Pour la dernière fois s'accomplissait l'admirable phénomène par lequel le visage de cette créature en expliquait la vie et les sentiments.. Tout en elle se purifia, s'éclaircit, et il y eut sur son visage comme un reflet des flamboyantes épées des anges gardiens qui l'entouraient. Elle fut ce qu'elle était quand Limoges l'appelait *la belle madame Graslin*. (p. 863)

彼女の顔に刻まれた多くの深い皺や黒ずんだ顔、鉛色の瘢痕等、彼女の美しさを損っていたすべてのものが消え去り、9歳時の、あの清らかな天使の顔が戻ってくる。我々はそこに、自分の犯した罪を公衆の前で懺悔することによって心の平和を見出したヴェロニックを見るのである。

以上が、主なヴェロニックの外貌の変化であるが、これを簡単にまとめると、表2になる。

表 2

事 件	9歳時	天然痘	結 婚	タシュロンとの恋愛	出産後	モンテニャック時代	死の直前
顔 色	白 色	褐 色	灰 色	白 色	黄 色	冴えない色	白 色
体つき	優雅な曲線	優 雅	痩せる	ぼったりした	痩せ細る	痩せ細る	
Sèmes	sinueux clair	sinueux sombre	anguleux sombre	bossué clair	anguleux sombre	anguleux demi-clair	clair
心 的 状 態	純粹無垢		失 望 無感覚	官能の喜び 生命に溢れる	絶 望 精神的苦痛	精神の 抑圧状態	平和な安らぎの状態

この表からもわかるように、ヴェロニックの純潔な魂が、現世の苦患に満ちた条件によって、その純粹性、澄明性を失うにつれて、顔は濁り、鈍重さを帯びてくる。天然痘にかかって以来、彼女の顔につきまとう天上的な要素と地上的な要素との混在は、肉体と精神の相剋を浮き彫りにするものである。また、死の直前に、顔の不純な要素が消し去られ、元の天使の輝きを獲得したことは、精神と物質の対立が止揚され、バルザックが常に目ざした〈*unité*<sup>10)</sup>〉に達したことを意味する。従って、ヴェロニックの生涯は、根源の〈*unité*〉に到るための闘いであったと言えよう。

## 第二章 自然描写

次に、自然とヴェロニックの関係を見てみよう。

彼女の心の状態は、しばしば自然の比喩を使って言い表わされている。例えば『ポールとヴィルジニー』を読んで、恋の思いに目覚める時、次のような件がある。

Son esprit exhala dès lors un parfum de poésie naturelle. Ses cheveux qu'elle nattait et tordait simplement sur sa tête, elle les lissa, les boucla. Sa toilette connut quelque recherche. La vigne qui croissait sauvage et naturellement jetée dans les bras du vieil ormeau fut transplantée, taillée, elle s'étala sur un treillis vert et coquet.(p. 655)

また、グランヴィル氏は「夫人の顔はちょうど冬の間はもの悲しい風景が、夏になれば素晴らしくなるようなものだ」(p. 677)と彼女の顔の表情を風景に喩えて形容している。

このように、ヴェロニックと自然には密接な関わりがある。

ところで、先に述べたように、ヴェロニックのリモージュ時代は主に彼女の顔つき、体つきの変化によって話が進められていた。それに対し、モンテニャック時代においては、バルザックは自然描写に専らページを費している。

特に、モンテニャックの自然の不毛さが様々な表現を使って述べたてられている。

La pays prend un aspect triste et mélancolique. Il se trouve alors de vastes plaines incultes, des steppes sans herbe, ni chevaux.(p. 705)

[...] cette nature est âpre, sauvage et sans ressources. Le sol de ces grandes plaines grises est ingrat. [...] Ces espaces oubliés par la génération botanique, et que couvrent d'infertiles débris minéraux, des cailloux roulés, des terres mortes, sont des défis portés

à la Civilisation.(p. 706)

Sur tous ces terrains sans destination est écrit le mot *incapacité*. (p. 707) (下線筆者)

このような灰色の不毛な土地の光景は、人の精神にも影響を及ぼし、物悲しい憂鬱な気分にする。そして、ここを通る詩人や思想家の目には、人によって恐怖ともなる無限(l'infini)の姿として映しだされる。未開の、原始的な状態のまま取り残された、この不毛な平原は、文明に対する挑戦でもある。しかし、この土地は一つの意味を与えられている。それは「大自然の広大な画面の中に欠かすことのできない影 (ombres)」(p. 706)なのだ。このような「無限」、「影」という意味を賦与された自然は、ちょうど人間の心の中における影の部分、抑圧された無意識の暗い部分を思い起こさせるものである。自然の悲惨さは、魂の苦悩に照応する。ヴェロニックが初めてモンテニャックにさしかかった時、案内役のボネ神父が不毛の土地を指して彼女に言う。《Voilà vos domaines》(p. 748)。この言葉は、文字通り、彼女の治める領地を意味しているのだろうが、彼女の不毛な心の状態をも、バルザックが暗示しているように思える。

このような自然を前にして、心に深い傷を負っているヴェロニックが、何らかの感銘を受けないはずがない。

Elle ne voyait pas sans une sensation inexprimable une nuée roulant sur des roches nues. Elle remarquait les sillons blanchâtres faits par les ruisseaux de neige fondue, et qui, de loin, ressemblent à des cicatrices. [...] enfin les tristesses, les splendeurs, les choses douces, fortes, les aspects singuliers de la nature montagnarde au centre de la France. Et à force de voir ces tableaux variés de formes, mais animés par la même pensée, la profonde tristesse exprimée par cette nature à la fois sauvage et ruinée, abandonnée, infertile, la gagna et répondit à ses sentiments cachés.(pp. 761-762)

彼女はこの厳しい自然に自分の魂の状態を見てとる。しかし、彼女が啓示を受けるのは、まさにこの厳しい自然の精神によってである。自然によって、悲しみと苦しみで気力を失った無感覚な虚脱状態から、未来に続く新しい境が開かれるのである。バルザックはこう語っている。「森林のどんな風景も一つとして自らの意味を持っていないものはない。どんな林間の空地、木の茂みも一つとして錯綜した人間の思想に何らかの類似性を見せていないものはない。教養があり、心に痛手を負っている人達の中で、森を散歩しながら森が語りかけてくる言葉を聞かない者があるだろうか。知らず知らずのうちに、一つの、心を慰撫するような声が、或いは恐ろしい声がおおかたは、恐ろしいより慰撫するような声—そこから立ち上がってくる」(p. 762)。ヴェロニックは、それまで彼女の夢が彷徨していた領域より高い次元の領域の存在を、モンテニャック

の自然の中に垣間見て、一種の幸福感を味わう。「彼女の心を『ふるい分け』ていたほとんど無意識的な瞑想によって、この光景が提出していた崇高な教訓を受け入れる素地ができていた彼女は、その教訓によって一種の麻痺状態から目ざめた」(p. 763)のだった。そして、「人間の魂も、土地と同様に耕されるべきだ」(ibid.)と悟るのである。

ところで、自然描写には他にも注目すべき特徴がある。モンテニャックの森が織りなす「素晴らしいつづれ織りの様々な変化」(p. 757) (正)と、灰色の未開地(負)とのコントラストである。「フローレンスの青銅のような」(ibid.) 柏の木、「緑青のような色調」(ibid.) の胡桃や栗の木、金色の葉等の明るい輝かしい色と、一本の木も存在しない、不毛の土地の赤褐色や鹿毛色、灰色の暗い色彩が対立して存在している。

モンテニャックの丘陵も片側は不毛、片側は肥沃の二面性を呈している。「一方には、かさかさの、起伏の甚しい形態。他方には優雅な形態、優美な屈曲線。一方には、平坦な石の塊や、むき出しの、草木も生えていない岩石が支えている痩せた土地の冷やかな、沈黙した不動の姿。他方には、様々な緑の木々」(pp. 774→775)。

ロッシュ＝ヴィヴから見下す二つの山脈も、「或る不可解な偶然のいたずら、或いは何か未知の〔……〕原因」(p. 781)によって、完全に相違した要素からなっている。右手には、かさかさで、草一つ生えていない、白亜質の、所々塩辛い水溜りや鱗状の地面が散在する渺茫たる平原が見えた。一方、左手の山々は、この上なく美しい木々に覆われていた。その麓には牧場が拡がり、その植物は「荒涼とした高原のおぞましい光景」(ibid.)と対照をなしていた。

この、何度も繰り返して現われる、不毛と豊饒とが隣り合わせに存在するモチーフは何を意味するのだろうか。不毛さを、ヴェロニックの内て抑圧された暗い部分とみなすならば、もう一方の豊饒さは、彼女が発達させ、伸ばしてきた心の明るい意識の部分とみなすことができるのではなからうか。

モンテニャックを不毛と豊饒とで二分している原因は水である。モンテニャックの森から流れる水は片側には豊富にいき渡り、もう片側へは一滴も流れ込んでいない。この土地を不毛の荒野にしているのは、ひとえに、「すべての生産の第一原則である水」(p. 707)の不足のためだとバルザックは説く。そして、沈黙と死が支配しているこの場所に、生命と喜びをもたらしたヴェロニックの創造行為は、水がどこで断ち消えになるのかつきとめ、自然の樋を利用して平野に水を誘導することにあつた。

ところで、バルザックの世界では、例えば『あら皮』において、「光 (lumière)」、「火 (feu)」が基調をなしているように<sup>11)</sup>、何らかの物質的要素が象徴として価値付けられていることが多い。バシュラールは、水は「自分の苦痛に泣くことしか知らず、眼がすぐ『涙に溺れる』女性の深い有機体的象徴<sup>12)</sup>」だと語っているが、ヴェロニックの物語は正に、女性的要素と結びついた「水」のイマージュに深く関わっていると断言しても差し支えないであろう。

ここで、『村の司祭』について考察を進める前に、「人間喜劇」全体における水の象徴性を少し見ておこう<sup>13)</sup>。

水はまず、自然の鏡として存在する。澄んだ水は、その純粋性と浄化作用によって地上の存在を理想化し、最も美しいイメージを映し出す。『呪われた子』において、二人の恋人が清純な愛に浸りつつ、海を眺める場面で、バルザックは二人を天使のような存在として水鏡に映し出している。《Comme deux zéphyr assis sur la même branche de saule, ils en sont au bonheur de contempler leur image dans le miroir d'une eau limpide.》(X, p. 947)

水の、純粋で深い調和は、ほとんど宗教的な高揚にも似た幸福感をもたらす。バルザックは、『あら皮』において、創造エネルギーが彼の内部領域に浸入し、靈感につき動かされる時の幸福感を、清らかな水の湖で泳ぐ喜びに喩えている。

Le plaisir de nager dans un lac d'eau pure, au milieu des rochers, des bois et des fleurs, seul et caressé par une brise tiède, donnerait aux ignorants une bien faible image du bonheur que j'éprouvais quand mon âme baignait dans les lueurs de je ne sais quelle lumière, quand j'écoutais les voix terribles et confuses de l'inspiration, quand d'une source inconnue les images ruisselaient dans mon cerveau palpitant.(X, p. 137)

創造エネルギーは、未知の源泉から、「小川のように流れ込んでくる」のである。『海辺の悲劇』においても、ルイ・ランベールは「海の中を泳いだ後に大気の中を泳ぐこと！ああ、未来のうちに泳いだことのない者がいるだろうか」(X, p. 1160)と魂の高揚を謳っている。

このように、《eau pure》は、若々しさの、そして青春に特有の「意識の高貴な純潔さ」(X, p. 126)の象徴であり、創造作用の源である。それと同時に水は、不安な心を鎮め、なごませ、生きる勇気を与えてくれる。晩年のヴェロニックが、タシュロンの妹の出現によって「止めの一撃」(p. 838)を受けた時、湖の美しい光景は、彼女を包み込み、動揺する彼女の心性全体を鎮める効果を及ぼしている。『あら皮』で、欲望の渦である都会に疲れたラファエルが、充実した安楽さ、魂の安らぎを見出すのも、モンドールの湖である<sup>14)</sup>。

水はしかし、純粋性のみが価値づけされているわけではなく、官能的な肉の愛も賦与されている。C. G.ユングは水の身体性について次のように語っている。「水は地上にあり手に触れうるものであり、衝動に支配される身体に含まれる液体、血液と血なま臭さ、獣の臭い、激情によって重い身体性である<sup>15)</sup>」。『あら皮』において、バルザックは娼婦たちの欲情をそそる表情を喚起するのに、激しい水のイメージを借用している。

Les yeux passionnées de ces filles, prestigieuses comme des fées, avaient encore plus de

vivacité que les torrents de lumière.(X, p. 109)

(下線筆者)

『谷間の百合』においては、フェリックスとモルソー夫人との川遊びの場面で、水の奏でる詩情によって、官能的な夢がかきたえられる様が描かれている。

L'agitation d'un amour plein de désirs contenues s'harmonie à celle de l'eau, les fleurs que la main de l'homme n'a point perverties expriment ses rêves les plus secrets, le voluptueux balancement d'une barque imite vaguement les pensées qui flottent dans l'âme.(IX, pp. 1123-1124)

以上我々が見てきたこれらすべての水の特性は、水の豊饒性に由来する。水は、大地を豊かにし、あらゆる生物を育む「生命の源」として存在する。だが反面、それは不吉な運命の表徴でもある。例えば、『呪われた子』では、水の不吉な性格が顕著に現われている。バシュラールは、この小説は、「海の力動的生と完全な照応状態にある一つの魂」を示したもので、主人公エティエンヌは「いわば大洋の憤怒に献げられている<sup>16)</sup>」と語っている。主人公の誕生の際の嵐の夜は、呪われた子供の人生に宿命的な徴をつけ、怒れる海は、悲劇的な事件の予兆となっている。

また、水は人を死に誘い込むものである。『幻滅』において、リュシアン・ド・デュパンブレが人生に挫折して自殺を考える時、まず頭に浮かぶのは、深淵に身を投げて死ぬことである。その水は「緑でも青でもなく、澄んでもいないし黄色でもない。光沢のある鋼の鏡のよう」(V, p. 689)であった。『ファチノ・カーネ』において、老いた盲人の苦渋に満ちた半生が語られるのは、「バステューユ広場の溝の黒い水」(VI, p. 1031)を前にしてである。水が不吉な影響を与える時、それは濁って澱んでいる。逆に言えば、水が清澄性と流動性を失う時、それは生命を涸らす不毛性を帯びてくる。

バルザックが『第二のファルチュルヌ』で、水を「生と死の源<sup>17)</sup>」と呼んでいるように、まさに水は本質的に、豊饒と不毛という両義性の上に立っていると言えよう。

『村の司祭』においても、水は「生と死の源」である。まず、ヴェロニックの前半の人生においては、ヴィエンヌ川が重大な意味を担っている。『ポールとヴィルジニー』を読んで愛に目覚める時、彼女は逸乐的な場面の繰り広げられる香わしい島への熱い想いを、ヴィエンヌ川に浮かぶ島に投影している。彼女はそこで、自然の奏でるハーモニーに恍惚となる。

[...] au bord de la Vienne où elle allait s'extasiant sur les beautés du ciel et de la campagne, sur les rouges magnificences du soleil couchant, sur les pimpantes délices des matinées trempées de rosée.(p. 655)

(下線筆者)

夕日の「赤々と燃える壮麗な眺め」は、彼女の内にある熱情に呼応し、「露に濡れた」朝の「悦楽」という表現も、彼女の内に呼び醒まされた性的欲望の反映である。

彼女は結婚後も、ヴィエンヌ川に臨んで素晴らしい眺めが見渡せる母親の別荘を欠かさず訪れ、そこでタシュロンに出会っている。従って、ヴィエンヌ川は不倫の愛と殺人の舞台でもある。「夕方の微風を受けて一面金色の小波を立てながら震えている」(p. 700) ヴィエンヌ川、そして河畔の緑の木々の織りなす「憂愁に満ちた色調の壮麗な混淆」(ibid.) は、水の豊饒性を余すところなく実現し、ヴェロニックの内にある官能性と照応している。

次に、モンテニャックでは、一転して不毛な自然が繰り返し描かれている。そこでは、「砂漠」、「乾燥し切った外観」、「かさかさに乾いた」、「干上がった川床」等という言葉が何度も現われ、不毛性を際立たせている。

しかし、水が全くないわけではない。雨期には奔流がごうごうとうなり声を立てるのが聞こえ、雪解け頃になると、大量の水が洪水となって流れ落ちる。が、モンテニャックの平野には一滴も流れ込んでいないのである。すべて白亜質の土壤に吸収され、そこに残るのは「緑の水溜り (flaques vertes)」(p. 777), 何も育たない「塩辛い水 (eaux saumâtres)」(ibid.) でしかない。村では、「溜り水 (eaux stagnantes)」(ibid.) の為に熱病が流行している。バルザックは「澱んだ水のように緑がかった (verdâtre comme une eau stagnante)」(p. 758) 不毛の平野とも言っているが、暗い、澱んだ水は否定的な水の様相である。

この、沈黙と死を生み出す不吉な水が、「生命の源」となるのは、そこに動きを与えることによってである。ボネ司祭はヴェロニックに次のように説く。「水の流れは露を与えてくれるでしょうし、露は土を肥やしてくれるでしょう。そしてその土でポプラが育ち、霧が流れて行くのをくい止めてくれます。更にその霧の成分はすべての植物によって吸収されるというわけです。これが、谷間に見事な植物が育つ秘訣です。沈黙が支配しているこの場所に、いつかあなたは生命を、喜びを、活動を目にするようになるでしょう」(p. 759)。

それは、彼女が否定し、抑圧してきた生命エネルギーに動きを与えることでもある。彼女は、焼けつくような乾いた川床に、さらさらと流れる水の音を聞きたいと思う。「生きたいと願っている多くの被造物が洩らす秘かな声」(p. 763) を聞きつけたのである。その時、「常に愛すべし (Toujours aimer!）」という言葉が、心の奥底から声となって湧き上がってくる。彼女は、外的自然の中に、自己の内的自然を類比的に発見したのであり、彼女の内に、生の持つ深い意味が開示される。すなわち、生それ自体は善でも悪でもなく、渾沌とした衝動でしかない。それは時には、抑制のきかない情動を惹き起こしたりする。しかし、見透しのない絶望的な状況の中で、新しい道を切り拓くのも、生の衝動である。水が、物質の生きようとしない惰性をつき動かすものであるように、生の衝動は、精神の怠惰な状態を打ち破り、新たな秩序を生み出す。ヴェロニックは、このような生の法則の卓越した智慧を自然から受け取ったのである。彼女は、モンテニャックの



禍の原因になっているものが、繁栄のもとになることに気づくと同時に、自分自身の禍のもとが、幸福に繋がり得ることを直観している。愛そのものを否定し、葬り去るのではなく、肉体的、地上的愛を神への愛に昇華させることによって、より高い自己の境地に達せらるうということ、悟ったはずである。だから「常に愛すべし！」という言葉が自ずから口をついて出てきたのである。

彼女が大掛かりな灌漑工事に取りかかって5年後には、何代にもわたって不毛の土地と思われてきた未開の原野が、緑に覆われ、産物がとれ、隈なく草木が植わるようになる。15年後には土地の改革が完全に成し遂げられ、モンテニャックはフランスでも有数の、美しい豊かな平原と化するのである。バルザックは、死期の近づいたヴェロニックが、ガブーの谷間にできた三つの池を訪れる場面を次のように描いている。

Le jour était superbe. Au ciel bleu, pas un nuage ; à terre, mille accidents gracieux comme il s'en forme dans ce beau mois de mai. [...] La nappe d'eau, claire comme un miroir et calme, comme le ciel, réfléchissait les hautes masses vertes de la forêt, dont les cimes nettement dessinées dans la limpide atmosphère contrastaient avec les bocages d'en bas, enveloppés de leurs jolis voiles. Les lacs, séparés par de fortes chaussées, montraient trois miroirs à reflets différents, dont les eaux s'écoulaient de l'un dans l'autre par de mélodieuses cascades.(p. 837) (下線筆者)

水は再び、清澄性と流動性を取り戻し、生気に溢れた自然の様相を呈している。我々は、かつてヴェロニックがヴィエンヌ川にみた豊饒性を、ここに再び見出すことができる。しかし、ここでは、感覚を激しく揺さぶる官能的なものよりむしろ、静寂と調和が支配している。このような自然の佇まいは、ヴェロニックの魂の完全な甦生を意味し、彼女の静かな心の境地を物語るものである。

この章では、自然描写に重点的に光を当ててきたが、我々はそこに、肯定と否定、明と暗、豊饒と不毛のリズムを見出し、それが一段高い水準で統合されていく過程を見ることができた。この自然の変貌過程はそのまま、ヴェロニックの魂の純化の過程に相応するものである。従って、彼女の周りで繰り広げられる自然の変化は、彼女の内部の意識されないドラマの象徴的表現だと言えよう。

### 第三章 ヴェロニックの心理分析

第一章、第二章において、我々はヴェロニックの身体特徴及び自然という外的事物の変化を通して、彼女の心の事象に迫ってきた。ここでもう一度、心的事実だけに目を向けて、彼女の生涯を見てみよう。

ヴェロニックは、16歳になるまでは、心と自然が完全に融合した、自我がまだ無意識から分離していない状態にある。エーリッヒ・ノイマンの言う、自らの尾を咬んで閉じた円をなす「ウロボロス<sup>18)</sup>」の状態にあると言える。すなわち、彼女は家族の中で母性的な庇護する力に包まれた状態にあって、社会から完全に隔離されている。バルザックは、小説の冒頭で「昔の町民家屋の素朴な俤」(p. 641)を残したヴェロニックの生家を紹介しているが、次のような件がある。

Depuis un temps immémorial on glissait de grossiers volets dans cette rainure, on les assujettissait par d'énormes bandes de fer boulonnées ; puis, les deux portes une fois closes par un mécanisme semblable, les marchands se trouvaient dans leur maison comme dans une forteresse.(p. 642)

この、重い錠戸と鉄板の門で「城壁」のように閉ざされた陰鬱な家が、ヴェロニックのウロボロス状態を象徴している。

彼女の本性は、聖体拝受の際に表に現われる。激しい感情が湧き起こると、内面の光によって天然痘の跡が消され、彼女の顔は神秘的な輝きをみせる。従って、彼女の中に眠っている本性は、豊かな感情であると言える。感情が発露を見出した時、彼女の顔は美しくなる。しかし、ヴェロニック自身は自分の豊かな感情を意識化しておらず、それは彼女の魂の奥底、暗い無意識の中に潜んだままである。

16歳の時、『ポールとヴィルジニー』を読んで初めて自我に目覚める。バルザックは、象徴的に彼女の自我の目覚めを語っている。「神の手か悪魔の手かは解らぬが、一つの手が、それまで彼女の目から『自然』を覆い隠していたヴェールを剥ぎ取った」(p. 654)。更に彼は引き続いて述べる。「どんな女性にも皆、その一生のうちには自分の運命を理解し、それまで沈黙していた身体器官が逆らいがたい力をもって語り始めるという、そういう瞬間があるものである」(ibid.)。

ヴェロニックの中に男性的要素が侵入し、それが「ポール」という理想化された形で、彼女の中に一つの元型とも言える男性像が形作られる。「女の命である恋の啓示」(ibid.)がこの本によってなされ、彼女の中で眠っていた感情機能<sup>19)</sup>が呼びさまされる。彼女の豊かな感情は、第二章でみた、ヴィエンヌ川の豊饒性の中に具現されている。

しかし、夫となったグララン氏は全く物質的な世界に生きている人物で、ヴェロニックの夢みた詩的な男性像とは相反するものである。瘦せて毛むくじらの手は「金勘定をしつけている人間の鉤形に曲がった指」(p. 661)を見せ、「均等な間隔の列をなして頬骨から口元に走る」(ibid.)顔の皺は、物質的利害に没頭している人物に見られるものである。このような男性に対して彼女は、激しい嫌悪感を抱く。彼との結婚に彼女が大きな失望を味わったのは当然のことであろう。

こうしてヴェロニックは、結婚によって、豊かな感情を発揮できないばかりか、無理に抑えねばならなかった。心情こそが彼女にとって生の精髓だったのに、それが妨げられた為、神経症的な障害をきたす。彼女の顔は醜くなり、眼差しは陰鬱な冷たさを帯びてくる。

一方、彼女はシラーやゲーテの作品など古今にわたる文学を読み、水彩画などをたしなんで知識を増やすことで、思考機能を発達させる。彼女は読んだ本について瞑想し、様々な方法を比較対照し、理解力と知識の広さを驚くほど増大していった。本来ならば、男性の手によってなされるべき教育を、彼女一人で成し遂げ、その結果「繊細な判断力」(p. 677)が彼女の顔立ちに深みを与える。こうして、「思考」中心の自我が確立される。

ところで、無意識の中に抑圧された「感情」は、その反動として意識の中に、未知の圧倒的な力として侵入する。それは聖なるもの、または悪魔的なものとして意識される。ヴェロニックはグロステートに次のように告白している。

[...] je sens en moi des forces superbes, et malfaisantes peut-être, que rien ne peut humilier, que les plus durs commandements de la religion n'abattent point. En allant voir ma mère, et me trouvant seule dans la campagne, il me prend des envies de crier, et je crie. Il semble que mon corps est la prison où quelque mauvais génie retient une créature gémissant et attendant les paroles mystérieuses qui doivent briser une forme importune. (p. 671)

これはまさしく、「感情」を蔑ろにした意識的態度に対して発せられた、無意識の警告である。この無意識の声に耳を傾け、その要求を意識に取り入れられない限り、それは人を呑み込む破壊的な要因となる。『セラフィタ』において、深淵に呑み込まれそうになるミンナの恐怖がヴェロニックを襲う。

Si quelque sentiment, quelque manie à cultiver ne vient à mon aide, je me sens aller dans un gouffre où toutes les idées s'émeussent, où le caractère s'amointrit, où les ressorts se détendent, où les qualités s'assouplissent, où toutes les forces de l'âme s'éparpillent, et où je ne serai plus l'être que la nature a voulu que je sois. (p. 671) (下線筆者)

ヴェロニックの目はしばしば、無意識からの、未発達な「感情」の現われとして「野蛮な輝き」をみせる。鋭敏な観察家ならば、「ヴェロニックが魂の奥底に押し込めた野性的性格の偉大さとか、下層民の持つ力」(p. 680)を必ず見抜いた筈だとバルザックは言う。

未発達な感情機能は、アニムス<sup>20)</sup>像においても低次のアニムス、すなわち肉体的な強さをもった男性像と結びつく。彼女が恋愛に陥るタシュロンの身体的な特徴は、エネルギーの強さを示す「縮れてごわごわした髪」(p. 733)、猛禽に似たぎらぎら光る目を持ち赤い唇は内に抑えられた狂暴性を示し、「快樂の情熱における奔放さの徴」(ibid.)となっている。これらすべての特徴は、タシュロンの野蛮な、野獣的な性格を意味している。死刑囚となった彼は、自分に近づく者に対して「激しく猛り狂った叫び声」(p. 696)を上げ、「癲癇のように身を震わせ」(ibid.)、猛獣のような激しい怒りを見せて襲いかかる。「野蛮人のような沈黙」(p. 689)、「荒れ狂う情念の暴風」(p. 696)等の比喻によって、原始的な本能に従って生きる男の姿が浮き彫りにされている。このような特性は、ヴェロニックの目に見られる「野蛮な輝き」に呼応している。

彼女はタシュロンとの恋愛によって、今まで抑圧してきた感情エネルギーの捌け口を見出す。この生命の充足感が、顔つきを一変させ、昔の天使のような顔を取り戻す。額に刻み込まれていた褐色の色調が消え、白い輝きを見せる。その輪郭は「ある内面の火によって」清められる。

このタシュロンとの愛は、エロスの肉的爱でしかなく、ヴェロニックは衝動的で、自己中心の主観性に落ち込んだように見える。しかし、それは、彼女の未発達な感情のなせる業で、それが外界の男性に投影された為に起こったものである。タシュロンのような野蛮な男性に、自分を縛りつけようとする自分の心の因子に気づき、それと対決してゆこうとすることによって、自己を豊かにしていく可能性がそこには秘められている。このような観点から見れば、彼女は自己発見への道に一步進んだことになる。

しかし、タシュロンとの恋愛は、彼の処刑によって悲劇的に終わる。それ以降、ヴェロニックは、苦行帯を身に着け、肉体的、精神的苦痛を引きおこすことによって、一層強く感情を抑圧し、むしろ放棄しようとする。「生の精髓」を失った彼女の顔は黄ばみ、唇は青ざめ、目は黒ずみ、深い皺に刻まれる。これらすべては、生や愛情を閉ざすものであり、ただ濃青色の虹彩の輝きだけが、生や愛に向かって開いているだけである。

生より死を望むヴェロニックは、魂の涸れた無感覚な状態に陥る。それは、第二章でみてきたモンテニャックの不毛な自然に象徴されている。彼女の症状は、ユングが「意識の緊張の弛緩<sup>21)</sup>」と呼ぶところのものである。「緊張が弛むと、それは主観的にもだるさ、無気力、憂鬱と感じられる。『やる気』を失い、太陽のもとへ出て行って仕事に向かう元気がでない。自らのうちに動こうとするものが何一つないので、自分が鉛のように感じられる。これは、自分に処理しうるエネルギーがなくなってしまうことからくるのである<sup>22)</sup>」。それは、生への意欲を弱め、精神の地平を局限するもので、人格の総体を狭めてしまう。

こうしたヴェロニックの魂の状態を見抜き、彼女を虚脱状態から解放したのが、ボネ神父である。彼はその繊細な心によって、信徒達の苦悩に対しては「女の持つ母性的な感覚」(p. 754)を備えていた。

[...] Monsieur Bonnet, dont la nature nerveuse, électrique se mettait facilement à l'unisson des malheurs d'autrui. Les âmes qui ressemblent à cette belle âme épousent si vivement les impressions, les misères, les passions, les souffrances de ceux auxquels elles s'intéressent, qu'elles les ressentent en effet, mais d'une manière horrible, en ce qu'elles peuvent en mesurer l'étendue qui échappe aux gens aveuglés par l'intérêt du cœur ou par le paroxysme des douleurs.(pp. 737-738)

バルザックは、ボネ神父を「判断の芸術家」ではなく「感情の芸術家」(p. 738)と呼ぶ。彼は、バルザックがしばしば母親たちや、優れた観察家に与えている「第二の眼 (Seconde Vue)」を賦与されている。彼の眼は、ヴェロニックの魂を覆い隠している肉のヴェールを貫き、魂の中に隠された秘密を嗅ぎ出す力を持っている。

彼は人の魂の状態を見抜くと同時に、自然の中に隠されている意味をも明らかにする。モンテニャックの自然を不毛なものとしている「深い裂け目 (déchirures assez profondes)」(p. 779)の存在に最初に気づいたのは、彼である。そして、「深い裂け目」が現在は、水を塞ぎ止める元凶となっているが、それに手を加えることによって、荒地を肥沃な土地に変容させる可能性を秘めていることを洞察したのも、彼である。干からびた魂を内に持っているヴェロニックにとって、「深い裂け目」の発見は大きな意味をもっている。それは、彼女が自らの内に持っている「裂け目」、意識の背後にある暗闇につながる。モンテニャックの自然に、彼女が大きな衝撃をうけたのは、そこに彼女自身の暗い情動の深さを見たためではなかろうか。それ故、ボネ神父は、彼女に対して、「むきだしの生の渾沌の闇に意味の光をさし入れる<sup>23)</sup>」魂の導師の役割を果たしていると言えよう。

彼が、ヴェロニックに訴えたのは、彼女の知性に対してであった。それというのも、彼女にあっては、他の女性とは反対に「知性が心に通ずる道」(p. 760)であることを彼は逸早く見抜いたからである。そして彼は成功する。「グララン夫人は、司祭の言葉によって悟性(l'entendement)に衝撃を受け、その確信に心を打たれ、その天使のような声音に優しい感情を揺り動かされた」(p. 758)。

彼女は、ボネ司祭の言葉によって心の眼を開き、モンテニャックの自然が提供する豊饒と不毛の二面性を自分の内に見出すようになる。自分が今まで知性や判断など理性的な面を発達させるばかりで、感情面をなおざりにしてきたことに気づく。自然が継母のような態度を示している、

荒れ果てた、見捨てられたままの不毛な土地に対して、母性的な感情が湧き起こってくる。この時、彼女は自分の内にある豊かな感情を抑圧するのではなく、それを認め、意識化し、のばしていくべきだと悟るのである。

今までは、劣等機能<sup>24)</sup>として「感情」は破壊的な力を持っていたが、意識の中に取り入れられることによって、創造的な性質を帯びてくるようになる。美しく、豊かに変わっていくモンテニャックの平野は、創造的な力が働いた、ヴェロニックの心の内部の変化の象徴である。

タシュロンという一人の人間への愛が、万人への愛、神への愛と上昇し、個人的な愛憎を捨てた時、ヴェロニックの顔は清められ、天使の輝きが甦ってくる。恐ろしい程深い皺に刻まれた、苦痛だけを表わした顔は、仮面がはずれ落ちる如くに消え、無邪気で純潔な顔となって生命と感情が輝き出す。肉体の愛も、その内に神への愛に到る変容力を秘めており、精神と肉体は対立しながらも、互いに補い合うことによって、より高い次元へ達することができるのである。

繰り返して言おう。ヴェロニックが無意識から押し寄せる情動を抑圧し排除している間は、情動は破壊的に働いて肉体的な苦痛すら与える。しかし、それを意識し、その現実性を承認することによって、情動の持つ危険な力は自ずから失われ、反対に心を豊かにする創造的な面が現われる。心の深層へ下りていくことによって、個人的願望や欲望の渦巻く主体的な自我の世界から、より広い世界、客体の世界に関心を向けるような意識が生まれてくる。

無意識の深淵へ下ることが、飛翔の第一歩となる。暗い闇から、創造の光が発するのである。それ故、バルザックの次の表現は、一見矛盾しているが、真理をついたものとなっている。

彼女は深い奈落 (abîme profond) の中に身を投じたに違いなかった。というのは、彼女はしばしば顔面に光の反映に似た輝きを浮かべ、はるかな高みから戻ってきたような様子をしていることがあったからである。(p. 655)

こうしてヴェロニックは、内部の源泉から湧き起こってくる拡大を意識し、統合性の高い人格へと発展することができたのである。

## 結 び

『村の司祭』は、題名からもわかるように、村の司祭、すなわちボネ神父の宗教的な慈善事業を中心に据えた小説となる筈だった。バルザックはこの小説について、ハンスカ夫人に宛てた手紙の中で、〈J'ai écrit le commencement du *Curé de village*, le pendant religieux du livre philosophique que vous connaissez le *Médecin de campagne*.<sup>25)</sup>〉と述べている。彼は『田舎医

者』が博愛主義者による教化事業であるのに対し、『村の司祭』では宗教者による、より一層意義のある事業を描こうとしたのである。ところが、その序説に過ぎなかったヴェロニックの物語が、いつのまにか小説の主題となり、彼女のドラマにすり替わってしまった。作者の意図とは違う小説が生まれたわけだが、それだけに、彼も気づかない無意識の力が大いに与ったことになる。だからこそ、彼の描く自然においても、人物の外貌においても、心的風景をその陰影として色濃くもっているであろう。これら現実性を持った、客観的事実がいつのまにか象徴となり、ヴェロニックの魂の世界を構成している。従って『村の司祭』は一人の女性の、自己を高めていく心的過程が主題になっている小説と言えよう。

## 註

バルザックのテキストの引用は、ほとんどすべて Balzac, *La Comédie humaine*, nouvelle édition 12 vols, Gallimard, <Bibliothèque de la Pléiade>, 1978 による。この全集からの引用は、本文中の引用の後、巻、ページ数をつけて（例えば I, p. 15）と記している。『村の司祭』に関しては巻（IX）を省略し、ページ数のみを記した。なお、『村の司祭』の日本語訳の一部は、バルザック全集第 21 巻、東京創元社、1975 の加藤尚宏訳を使わせてもらった。

- 1) バルザック『風俗のパトロジー』山田登世子訳、新評論、1982, p. 108.
- 2) *Ibid.*, p. 107.
- 3) <Chez moi, l'observation était déjà devenue intuitive, elle pénétrait l'âme sans négliger le corps ; ou plutôt elle saisissait si bien les détails extérieurs, qu'elle allait sur-le-champs au delà.>(VI, p. 1019)
- 4) アルベール・ベガン『真視の人バルザック』西岡範明訳、審美社、1973, pp. 45-46.
- 5) *Ibid.*, p. 46.
- 6) *Ibid.*
- 7) 『風俗のパトロジー』山田登世子訳、p. 113.
- 8) Yücel は<sinueux>のカテゴリーに属する者の特徴を表 3 のようにまとめている。  
(*Figures et Messagers dans la Comédie humaine*, maison mame, 1972, p. 60)
- 9) モルソー夫人がフェリックスに向かって<Nous devons passer par un creuset rouge avant d'arriver saints et parfaits dans les sphères supérieurs.>(IX, p. 1121) という件がある。
- 10) バルザックは『ルイ・ランペール』において次のように書いている。<L'Unité a été le point de départ de tout ce qui fut produit ; il en est résulté des Composés, mais la fin doit être identique au commencement.>(XI, p. 691)
- 11) Agnès Guglielmetti がその著 *Feu et Lumière dans la Peau de Chagrin de Balzac*, Lettres Modernes, 1978 の中で『あら皮』における「光」や「火」の象徴的意味を分析している。
- 12) ガストン・バシュラール『水と夢』小浜俊郎、桜木泰行訳、国文社、1980, p. 125.
- 13) 水の象徴性については、J.-L. Steinmetz が *L'Année balzacienne 1969*, Garnier, pp. 3-31 で *L'eau dans <La Comédie humaine>* という表題のもとに分析しており、それを参照した。
- 14) <Ce lac est le seul où l'on puisse faire une confidence de cœur à cœur. On y pense et on y aime. En aucun endroit vous ne rencontreriez une plus belle entente entre l'eau, le ciel, les

表 3

(Figures et Messagers dans la Comédie humaine, maison mame, 1972, p. 60)

ASPECT TRAITS	FORME	COLORIS	SUBSTANCE
Cheveux	milliers de boucles	blondes	ruisselant en cascades
Visage	calices	blancs	qui fleurissent au sein des eaux
Œil	fendu en amande	étincelant	à travers une humide vapeur
Bouche	pleine de sinuosité	aux lèvres de colail, aux dents vernies, transparentes	(transparentes)
Cou	de cygne aux lignes fuyantes	(de cygne)	(lignes fuyantes)
Taille	cambré		facile à ployer
Mains	aux doigts en fuseaux, aux ongles comme des amandes	de rosée	comme des gouttes
Pieds	bien attachés, recourbés		
Sèmes	Sinuosité	Clarté	Fluidité

montagnes et la terre. Il s'y trouve des baumes pour toutes les crises de la vie. Ce lieu garde le secret des douleurs, il les console, les amoindrit, et jette dans l'amour je ne sais quoi de grave, de recueille, qui rend la passion plus profonde, plus pure. Un baiser s'y agrandit. Mais c'est surtout le lac des souvenirs ; il les favorise en leur donnant la teinte de ses ondes, miroir où tout vient se réfléchir.》(X, pp. 269-270)

- 15) C. G.ユング『ユングの象徴論』野村美紀子訳, 思索社, 1981, p. 159.
- 16) バシュラール『水と夢』, p. 247.
- 17) Balzac, *Œuvres complètes*, Club de l'Honnête homme, 1956, t. 21, p. 282.
- 18) エーリッヒ・ノイマン『女性の深層』松代洋一, 鎌田輝男訳, 紀伊国屋書店, 1980, p. 12 参照.
- 19) ここで問題にしている「感情機能」とは、ユングの使う四つの心理機能（思考、感情、感覚、直観）の「感情」のことである。感情は思考と対立関係にある。普通人間は四つの機能のうち、どれか一つを素質としてもっており、それを発達させる。それと反対の機能は無意識の領域に沈められている。ヴェロニックにおいては、素質としての「感情」を伸ばしながら、思考機能を発達させていくのが望ましい。
- 20) ユングの用語：女性における男性像のことで、外部世界の男性及び女性自身の内に働いている男性原理をさす。エンマ・ユングはアニムスを(1)力(2)行為(3)言葉(4)意味の四段階に分けている。(1)は肉体の力強さ、(2)は勇ましい行為、(3)(4)は知的なロゴス原理を表わす。タシュロンは、最も程度の低い(1)の段階にある。
- 21) ユング『ユングの象徴論』, p. 82.
- 22) *Ibid.*
- 23) *Ibid.*, p. 183.
- 24) 註19) で解説した心理機能のうち、ユングは最も発達分化させたものを「上位機能」、逆に意識下に抑圧され、未発達の機能を「劣等機能」と呼んでいる。
- 25) Balzac, *Lettres à Madame Hanska*, les Bibliophiles de l'Originale, 1967, t. I, p. 614.